



Title	春曙文庫蔵源氏物語断簡（帚木・藤裏葉・橋姫・宿木・手習）解題と翻刻
Author(s)	飯田，実花；川渕，紗佳
Citation	詞林. 2023, 74, p. 42-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/93069
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

春曙文庫蔵源氏物語断簡

(帚木・橋姫後半・宿木・手習) 翻刻(訂正版)

【注意】

本ファイルは、『詞林』七十四号(二〇二三年一〇月二〇日)掲載の飯田実花・川渕紗佳「春曙文庫蔵源氏物語断簡(帚木・藤裏葉・橋姫・宿木・手習) 解題と翻刻」のうち、翻刻部分の不備を訂正したものです。元の翻刻では、各丁の「オ」と「ウ」が逆であり、版面も表丁と裏丁が逆になってしまっていました。確認不足ゆえに本来の断簡の状態とは異なるかたちで掲載してしまったことをお詫び申し上げます。

【凡例】

- 一、春曙文庫蔵源氏物語断簡(春15)のうち、帚木・橋姫後半・宿木・手習を翻刻した。
- 一、各巻の冒頭には**帚木**として巻名を示し、縦線を付した。
- 一、巻途中の落丁箇所については点線で示した。
- 一、翻刻に際して、文字は通行の字体に改めた。
- 一、改行は、底本の改行をそのまま反映した。
- 一、丁移りの際には、行末に「」を付し、巻毎の丁数・表裏を示した。また、○内に『源氏物語大成』の頁数・行数を示した。

一、翻刻に際しては、底本が国書データベースで公開されている状況に鑑み、底本を再現するのではなく、以下の記号を用いた。

- ・取り消し線 見せ消ち訂正
- ・○ 補入記号なしの傍書
- ・△ 補入記号ありの傍書

帚木

てねたるへき中將のきみはいとこに
そ人けとおかき心ちして物むつかし
きひとふなれはなけしのしもに
人／＼ふしていとふなりしもになんゆき
をりてたゝいまなんまうのほらん
とはへりつといふみなしつまりぬるけ
はゐなれはかけかねおはなちて心み
にひきみれはあなたよりかさゝさりけ
りき丁をさうしくちにさしてから
うったへ物をきてみたりかはしき

「1才

(六八頁6行目〜10行目)

おわけいり給てけはゐするほとに
より給へれはいとさゝやかにてふし
たりひはほのくらきになまわつ
らはしけれとうへなるきぬをお
しやり給におんなはたゝよひつ
る人とおもひけりいとしのひて中将
めしつれは人しれぬおもひのしるし
ある心ちしてといふをとかうも
おもひわかれすものにおそはるゝ
こゝちしてやゝとおひゆれはとかほに

「 1ウ

(六八頁 10 行目ゝ 14 行目)

そてのさはりておともきこえす
うちつけにふかゝらぬ心とおほさん
もことはりなれととしころおもひわ
たる心のうちもきこえしらせんとて
かゝるおりをまちいてたるもさらに
あさうはあらしとおもひなし給へ
といとやはらかにておにかみもあら
たゝすましきはゐなれははし
たなうあさましようこゝにはさへき
人もはへらすなとたかへにこそ

「 2オ

(六八頁 14 行目ゝ 六九頁 5 行目)

はへめれといふもいふもいきのした
なりきえまとへるけしきいとこ
こしらうたけなれはおかしうお
ほさるたかうへうもあらぬ心の
しるへなるをおもはずにもおほ
めい給めるかなすきかましようは
みえたてまつらしおもふことみえ
てすこしきこゆへきとていとさゝ
やかなれはかきいたきてさうし
のうちいれ給にあやしくそも

「 2ウ

(六九頁 5 行目ゝ 9 行目)

ちよりたれとめつる中将めく物
きたるきたるやゝとのひにあやし
くてたちよりたれはにほゐきて
かほにもかゝるこゝちすれはおもひ
よりぬあさましやこはいかなること
そとおもひさわかるれときこゆ
へきかたもなしなみ／＼の人ならば
こそあらゆらかにもひきがなく
らめたれたに人のあまたしらんは
いとをしるへき見さわきてした

「 3オ

(六九頁 9 行目ゝ 13 行目)

ひきたれとかなくおくなるを
ましにふし給ぬさうしひきた
てゝ御むかへにおものとれよとの給へは
女きみ心あはせてかゝるとしもやと
ひとのおもふらんとわりなくおもふに
なかれぬはかりにあせになりていと
なやましけにさへみゆいとこより
はかりいて給ことにそあらんとしころ
もすこしつへうあなかななる
まにて物をのたまひつくすへ

― 3ウ

(六九頁13行目ゝ七〇頁3行目)

かめれとなをいとわか／＼しきこ
こちしはへるはうつゝとおもふ給
へられすこそかすならぬみながら
かうおほしくたしける御心のほと
はいかゝわあさましようとおもふ給へし
らさらんいとかうやうなるきは／＼
きはとこそはへなれとおしたち
給へるなさけなさおうしとおもへ
るもけにいとをしうはつかしけな
れはそのきは／＼も又おもひしらぬう

― 4オ

(七〇頁3行目ゝ8行目)

みことなれはなか／＼いとなしたる
いとうたてなりけるおのつからきた
まうやうもあらむあななちに
すきかましき心とはさらにならぬ
をさるへきにやしふかくあはめ
られたてまつるもいとわりなう
ことわりなるにみつからもあやし
きまてなんとまめたちてもす
へくよろつにの給へといとはつかし
けにたくひなき御けはいのいよ／＼

― 4ウ

(七〇頁8行目ゝ12行目)

うちとけきこえんもはつかしければ
すくよかに心つきなしとはみへたて
まつるともさるかたにいふかひなくて
もすくしてむと心つようおもひな
してつれなくもてなすひとほ上の
たをやかなるにつよい心をしひ
てくはへたれはなよたけの心ちして
さすかにをくへくもあらすふしこと
に心やましようてあやにくけなる
心さまをいふかひなしとおもひて

― 5オ

(七〇頁12行目ゝ七一頁2行目)

なくさまいとあはれけなりあなか
ちに心くるしうはあらねとみさら
ましかはたさう／＼しからましとおほす
なくさめかたうおもへれはなとかううとま
しき物にはおほすへきおもむきさまなる
おこそちきりありとはおもひない給らめ
むけによをしらぬけしきにおほされ
たるけしきなんいとつらきことうら
みられていとかううきみのほとのさ
たまらぬありしなからにてかゝる御

「5ウ

(七一頁2行目～7行目)

ほとにみへ給へるみにしむはかりにお
もふつるすき心ともゝあへかゝめ一月はあり
あけにてかけをさまれる物からかほやさか
に見えてなか／＼おかしきあとやほのなりな
に心もなくそらのけしきもたゝみるひと
からとのみゑんにも見ゆるなりけり人しれぬ
御心にはいとむねいたくかへりみかちにていて
給てとのにかへりおはしてもとみにまとろま
れ給はす又あひみるへきかたなきをあ
はれにこの人のおもふらんことはましていかならんと

「6オ

(七二頁13行目～七三頁5行目)

心くるしうおほしやるすくれたることは
なけれとめやすくもみえつるになゝ
このしなゝなからくまなうみあつむる
人のいひしことのはゝけにとおほしあは
せられてにしおもてのかうしいそきあけつ
るけはぬもさるかたにゆかしかりけり
このころはとのにのみおはすなをかの
のうちたへておもふらんこと御心にかゝりて
くるしきをおほしわひてきのかみをめ
したりかのありしとう中納言こゝに

「6ウ

(七三頁5行目～9行目)

ゑさせよらうたけにみへしおみにちかう
つかふひとにせんうへにもわれたてまつらん
との給へはいとかしこきおほせ事にはへり
かのあねなる人にいひはへらんと申にも
むねつふれ給へとつれなくてその
あねきみはあそこのおとゝやもたれた
るさもはへらすこの二三ねんこそかくても
しはへれをやのおきてにあらすところ
ゆかぬやうになんきゝたまふすときこ
ゆれはあはれのことやはむたしからすき

「7オ

(七三頁9行目～14行目)

こゆる人そかしまことによしやとのたまはす
れはこともなくはへるへしいともてはなれう
と／＼しうはへれは世れいにてなむむつひ
はへらぬときこゆさてかのこきみは

五六はかりありてゐてまいれりこまや
かにおかしきことはなけれとなまめき
あてなる人とみえたりめしいれていとな
つかしうかたらひ給へはわらは心ちに
いとうれしとおもふあねきみの御ことの
いとくはしうとひ給へはわらは心ちにさる

「 7ウ

(七三頁 14 行目～七四頁 7 行目)

へきふし／＼はいくゑきこゑ給いとほつ
かしければうちいてにくゝおほさるれと
いとよくかたらひたまひて御ふみかき
給あやしとおもふにこま／＼とみゝにあてゝ
いひしらせ給かゝることこそはといとおもひ
かけかたけれとおさな心ちふかうもたと
らすもてきたれはおんなむねつふれて
あさましきになみたもおちぬこのこのおも
ふらんこともはつかしうてさすかに御ふみを
おかくしにひきひろけたりいとおほくて

「 8オ

(七四頁 7 行目～9 行目)

みしゆめをあふよありやとなけく
まにめさへあはてそむころへにけるぬる
よなればなといとめとまりぬへき御かき
さまなれとみいれられすめもきりて
心えかたきみのすくせうさそひたり
けるをおもひつゝけうちふし給へり又
のひそのきみをめしたれはまいるとて
御かへりこへはかゝす御ふみわくへうも
あらずときこえよといへはうちわらひて
たかふへくもあらずの給はせしをいかゝ

「 8ウ

(七四頁 10 行目～14 行目)

さはきこゑむといふお心やましくて
のこりなうの給きかせけるとおもふに
つらきことかきりなしいておよすけたること
はいはぬ物そさはなたまはりそとけしき
あしければめすにはいかゝとてまいりぬかの
みすいたる心ちにこのまゝはゝのありさま
をよにめてたしとおもひてついせう
しよるころなれはこきみわはくる
まにてゐてありくこきみめしよせて
きのふはまちくらしやみにきあひおもふ

「 9オ

(七四頁 14 行目～七五頁 5 行目)

ましきなめりとの給にかほうちあかめて
いつらとの給にしか／＼なんはらたちちはへ
るときこゆれは心のことやとて又もたまへ

りあこはゑしらしなそのいよのおきな

とものさきよりみたてまつりそめし

ひとそされとたのもしけなくひほ

そとふつつかなるこゝろてこしつき

ゑりまうけ給へるそかしきみは

あかこにてあれよかのをやはたのもし

けなれとゆくさきみしかゝめりなと

「 9 ウ

(七五頁5行目ゝ9行目)

の給へはさもありけんいみしかりけること

とおもへるもおかしとおもほす又御ふみ

も給へりされとこのこもいとほかなし

心よりほかにちりもせはかる／＼しき

なさへそへむみのありさまををいとつ

きなくおほえてめてたきひとなり

ともわかみこそと思へはいとすきかま

しきことのふさはしからぬうちとけ

たるけはゐもきこゑすほのかな

りし御けはひなとおけによになへ

「 10 オ

(七五頁9行目ゝ七六頁2行目)

てなとはおもひきこえぬにしもあらね

とをかしきさまをみえたてまつりて

なにゝなるへきみそとおもひかへす

なりけりきみもおほしおこたるお

りもなくこひしきよりも心くるし

うおもへりしさまをおほしわたる

かる／＼しくはひまきれてたちより

たまはんにも人めしけゝなれはす

き／＼しきふるまひやあらはれんとは

はとさまかうさまにおほしくらす

「 10 ウ

(七六頁2行目ゝ7行目)

橋姫

もてなひ給はんも中／＼うたてあらむ

れいのわか人にゝぬこゝろはへなんめる

をなからむのちもなとひと事うち

ほのめかしてしかはさやうにて心そ

とめたらんなどのたまひけり御みつ

からもさま／＼の御とふらひ野山の

いはやにあまりし事などの給トけりト

ゆまうてんと思しすおもひて三宮の

かやうにをくまりたらんあたりのみ

まさりせんこそをかしかりけれとあ

「 9 オ

(一五三二頁14行目ゝ一五三三頁4行目)

らまし事にの給ふものをきこゑはけま

して御心はけまひたてまつらんとおほひ

てのとやかなるゆふくれにすひり「まいり」給へりれい

のさまなる御ものかたりきこゑかわし

給ふついでにうちのみこの御事きこ

ゑいてゝみし「あ」か月のありさまなとくは

しうのたまひいてたるに宮いとせちに

をかしとおほいたりされはよと御けしきを

みいてゝいとゝ御心うこきぬへくいひつゝけ

給ふさてその返事有けんは何かみせ給 「9ウ

(一五三三頁4行目ゝ9行目)

みせ給はさりしまろならましかはとうらみ給ふ

さかしいとさま／＼に御らんすへかんめるはし

をたにそみせさせ給はぬかのわたりはいとむ

しんにうもれたるみにか引こめてやむ

へきけはひにも侍らねはかならず御らんせさ

せはやと思給れといかてかはたつねよらせ給へき

かやすき程こそすかまほしくはいとよくて

すきぬへきよにて侍けれかくろえおほかめ

る哉さるかたにみところありぬへき女もの

をものはしくうちしのひたるすみかとも 「10オ

(一五三三頁9行目ゝ一五三四頁1行目)

やまさとめいたるくまさなとにをのつ

から侍らんめりこのきこゑさすわたりはいと

よつかぬひしりさまにてこち／＼しうそ

あらんととしころ思あなつりてみゝをた

にこそとゝめさりつれほのかなりし月

つきかけのみを「と」りせすはまをならむ「む」はや

けはいありさまはさはかりならんをそあ

らまほしき程と思給へ侍へきなときこゑ

たまえははて／＼はまめたちていとね

たくおほろけのひとに心ゆるさぬ人の 「10ウ

(一五三四頁1行目ゝ6行目)

かくふかく思へるををろかならずゆかしうを

ほす事かきりなくなり給ぬなをまた／＼よく

けしきみ給と人をすゝめ給てかきり

ある身の程よたけさをいとわしきまで

心もとなしとおほいたれは「をかしうて」いてやうなき

てそ侍しはし世中にとゝめしと思給

ふるやある身にてなをさり事もつゝま

しきなりもしこゝろなからかなは

ぬこゝろつきそめなはおほきにた

かふへき事ときこゑ給へはいてあな 「11オ

(一五三四頁6行目ゝ11行目)

事／＼しれいのをとろ／＼しきひし
り事はみはてゝしかなとてわらひ
給ふこゝろのうちにはかのふる人のほのめ
かしゝすちなとのいとゝをとろかされ
てものははれなるにをかしとみる事
もめやすしときくあたりにも何はかり
こゝろにもとまらさりけり十月になりて
五六日程にうちへまうて給ふあし
ろをこそこのころは御らんせめとき
こゆる人／＼あれと何かそのひを
「 11ウ

(一五三四頁 11行目～一五三五頁 2行目)

んしにあらそふ身にてあしろにもよら
むとそきゝすてたまふてれいのし
のひやかにていてたちたまかひてかる
らかにあしろくるまにてかとのなを
しさしぬきぬはせて事さらにき給
へり宮まちよろこひ給て所につけ
たるおほんあるしなとをかしうし
なし給にくれぬれは御とのあふらちかく
てさき／＼みさし給つるふみともの
ふかきなどあさりもさうしをろ
「 12オ

(一五三五頁 2行目～6行目)

してきなどいはせ給ふうちもまとろ
ますかはか風のいとあらましきに
木葉のちりかふをとみつのひゝきな
とあはれもすきてものをそろしく
心ほそき所のさまなりあけかたちかく
なりぬらんと思ほとにありしゝのゝ
め思いてられてきんねのあはれなる
事のついてつくりいてゝさきのたひ
きりにまとはされ侍しあけほのにい
とめつらしきものゝねひとこゑきゝ給し
「 12ウ

(一五三五頁 6行目～11行目)

のこりなん中／＼ゆかしくあかすおもふ
たまへらるゝなんと申給ふいろをも
かをもおもひすてゝし後むかしきゝし
事もみなわすれてなどのたまへと
人めしてきんとりよせいとつきな
くなりたりやしるへする物ゝねに
つけてなん思いてらるへかんゆりけりと
てひわめしてまら人にそゝわゝのゝかし
たまふとりてしらへ給ふさらにほの
かにきゝ給しをなしものとも思
「 13オ

(一五三五頁 11行目～一五三六頁 2行目)

給へられされけり御事のひゝきから
にやとこそおもひしかとて心とけ
てもかきたて給はすいてあなさかなや
しか御みゝとまるはかりのてなとは
いつくよりかこゝまてはつたはりこんある
ましき御事なりとてきむかきな
らし給へるいとあはれに心すこし
かたえはみね松風のもてはやすな
るへしいとたとゝしけにおほめ
き給てこゝろはへあひて人はかり

「 13ウ

(一五三六頁2行目ゝ7行目)

にてやめたまひぬこのわたりにを
ほえなくてをりゝほのめくさうの
ことこそこゝろえたるにやときくを
りはんへられとみゝとめてなんともあ
らてひさしうなりけりやこゝろにま
かせてをのゝかきならすへかんめるをか
はなみはかりやうちあはすらんろ
なうものゝよふにすはかりのひやうし
なともとまらしとなんおほえ侍とて
かきならし給へとあなたにきこゑ

「 14オ

(一五三六頁7行目ゝ11行目)

たまえと思よらさりしは人ことをき
き給けんたにあるものをいとか
たはならむひきいりつゝみなきい
給はすたひゝそゝのかしきこゑ
たまえとゝかくきこゑすさひて
やみ給ぬれはいとくちをしうおほ
ゆそのついてもいあやしうよつ
かぬおもひやりにてすすありさま
ともにおもひのほかなる事なとはつ
かしうおほいたりひとにたにいかて

「 14ウ

(一五三六頁11行目ゝ一五三七頁2行目)

しられしとはくゝみすくせとけふあ
すともしらぬ身ののこりなさにさ
すかにゆくすへとをき人はおちあふ
れてさすらへん事これのみこそけ
によをはなれんきわのほたしなり
けれとうちかたらひたまえは心
くるしうみたてまつり給わさ
との給うしろみたちはかゝし
きすちには侍らすともうとゝし
からすおほしきこゑさせんとなん

「 15オ

(一五三七頁2行目ゝ6行目)

思給ふるしはしもなからへ侍らんのち
の程はひと事もかくうちいてきこゑ
させてんさまをたかえ侍まし

くなんなむと申給へはいとうれし
き事とおほしのたまふさて

あか月かたに宮の御をこなひし給
ほとにかのをい人めしいてゝあい給へ

りひめ君の御うしろみにてさふら
はせ給ふ弁の君とそいひけるとしは
六十にすこしたらぬほとなれとみや

「 15
ウ
(一五三七頁 6 行目ゝ 10 行目)

ひかにゆへあるけはひしてものなど

きこゆこ権大納言君よとゝともにものふ思
つゝやまひつきはなくなり給にしありさ
まをきこゑいてゝなく事かきりなしけによ

そのひとのうへときかんだにもあはれなる
へきふる事をましてとしころおほつかな

くゆかしういかなりけん事のはしめ

にかと仏にもこの事をさたかにしらせ給
へとねんしつるしるしにやかく

ゆめのやうにあはれなるむかし 「 16
オ

(一五三七頁 10 行目ゝ 一五三八頁 1 行目)

かたりをおほえぬついてにきゝつけ

つらんとおほすになみたとゝめかたかり
けりさてかくそのよの心しりたる人もの

こり給へりけるをめつらかにもはつかし
うもおほゆる事のすちになんかくつ

たふるたくひやまたもあらんとし
ころかけてもきゝをよはすなんあり

けるとの給へはこ侍従と弁とをはなれて
またしる人侍しひと事にてもま

た事人にうちまねひ侍らすかく 「 16
ウ

(一五三八頁 1 行目ゝ 6 行目)

もはかなくかすならぬ身のほとに侍と

夜ひるかの御かけにつきて侍しかは
をのつからものゝけしきをみたてま

つりそめしに御心よりあまりて

おほしけるとき／＼たゝ二人の中に
なんたまさかに御せうそのかよひ

も侍しかたわらいたければくはし

うきこゑさせすいまはのとちめに
なり給ていさゝかのたひをく事の

侍しをかゝる身のをきところ 「 17
オ

(一五三八頁 6 行目ゝ 11 行目)

なくいふせく思給へわたりいかにし
てかはきこしめしつたふへきと

はか／＼しからぬねんすのついてにも
おもひたへつるを仏はよにをはしけり
となん思給へしりぬる御らむせ

さすへきものもはんへりいまはなにかは
やきもすて侍なりかくあさゆふの

きえをしらぬ身のうちすて侍なは
をちゝるやうもこそといとうしろ

めたなく思給ふれと世この宮わたりにも
「 17ウ

(一五三八頁11行目～一五三九頁2行目)

とき／＼ほのめせ給ふをまちいて給し
たてまつりしかはすこしたのもしう

かゝるをりもやとねんしはりつるち
からいてまうてきてなんさらにこれは

このよの事にもはへらすしとなく／＼
いとこまやかにむまれ給ける程の

事もよくおほえつゝきこゆむなし
うなり給しさはきにはゝに侍し人は

やかてやまひつきて程もへすかくれ侍
にしかはいと思給へしつみふちころもたち

「 18オ
(一五三九頁2行目～6行目)

かさねかなしき事思給しほとに

としころよからぬ人の心つけたり

けるか人とくはかりこちてにしのうみのはて

までとりもてまかりにしかはその事さへ

あとたえてその人もかしこにてうせ

侍にしのちとゝせあまりになりてなん

あらぬよのこゝちしてまかりのほりたり

しをこの宮はちゝかたにつけてわら

はよりまひりかよふゆへ侍しかはいまは

かういとよにましらふへきさまにも
「 18ウ

(一五三九頁6行目～11行目)

侍らぬをれんせい院の女御の御方なと

こそはむかしきゝなれたてまつ

りしあたりにまいりよるへく侍し

かとはしたなくおほえ侍てえ

さしいて侍らてみやまかくれのくちき

となりて侍なりこ侍従はいつかうせ

侍にけんそのかみわかさかりとみ侍し

人かすすくなくなり侍にけるすゑ

のよにおほくの人にをくるゝいのち

をかなしく思給へてこそさすかに
「 19オ

(一五三九頁11行目～一五四〇頁2行目)

めくらひ侍れなときこゆる程にれ
いのあけはてぬよしさらはこのむか
しものかたりはつきすへくなんあら
ぬこゝちしけるをまた人きかぬ

こゝろやすき所にてきこゑ侍らすとそ
いひし人はほのかにおほゆるをいつゝ
むつはかりなりしほとにやありけん
にはかにむねやみてうせにきとなん
かゝるたいめんなくはつみをもきみにて
すきぬへかりける事などの給ふ

「 19 ウ

(一五四〇頁2行目〜6行目)

さゝやかにをしまきあはせたるほん
ことものかひくさをふくろにぬい
いれたるとりいてゝたてまつる御まへ
にてうしなはせ給へ我なをいく
へくもなりにたりとのたまひはせて
この御文をとりあつめたまはせ給
たりしかはこ侍従に又あひみ侍ら
むついてにもさたかにつたへまひらせ
んと思給へしをやかてわかれ侍にし
もわたくし事にはあかすかなしう

「 20 オ

(一五四〇頁6行目〜11行目)

思たまふるときこゆつれなくてこれは
かくいたまひつかやうのふる人とはすかた
りにやあやしき事のためしにいひいつ
らんとくるしうおほせとかへす／＼もゝ
らさぬかよしをちかひつるさもやと又
思みたれ給に御かゆこはいゝなとまいり
給ふ昨日はいとまひなりしをけふ
うちの御物いみもあきぬらん院に女一
宮なやみたまふ御とふらひにかならずま
いるへければかた／＼いとまなく侍をまたこの

「 20 ウ

(一五四〇頁11行目〜一五四一頁2行目)

宿木

みちをふみわけけるあともみえぬをみ
いたしてとみにもえいて給はすいとけし
きあるみ山木にやとりたるつたの
いろそまたのこりたるこたになとひ
きとらせ給て宮へとおほしてもたせ
給

やとりきとおもひいてすは木のもとの
たひねもいかにさひしからまし
とひとり給をきゝてあまきみ

あれはつるくちきのもとをやとりきと

「 1 オ

(一七六四頁三行目〜九行目)

おもひをきけるほとのかなしき

あくまでふるめきたれとゆへなく

はあらぬをそいさゝかなくさめにはおほし

ける宮にもみちたてまつれはおとこ

みやおはしましけるほとなりけりみなみ

の宮よりとてなに心もなくもてまい

りたるを女君れのむつかしき事

もそとくるしうおほせととりかく

すへきことかは宮をかきつたかなと

たゝならすの給てめしよせてへみ給御

「1ウ

(一七六四頁9行目ゝ14行目)

文には日ころなに事かおはしますらん

山さともものし侍ていとみねのあさき

りにまとひ侍つるほと御物かたりとも

みつからんかしこのしむてんたう

になすへきことあさりにいひつけ侍にき

御ゆるし侍てこそはほかにうつすことも

ものし給侍らめ弁のあまにさるへき

おほせ事はつかはせなんとそあるよくも

つれなく書給へるふみかなまろあり

とそきゝつ覧との給もすこしはけに

「2オ

(一七六四頁14行目ゝ一七六五頁5行目)

さもやありつらん女君はことなきを

うれしと思給にあなか「ち」にかくの給

をわりなしとおほしてうちえんして

ぬ給へる御さまよろつのつみゆるしつ

へくをかし返事書給へみしやとて

ほかさまへみむき給へりあまえてかゝさら

むもあやしければ山里の御ありき

のうらやましくも侍かなかしこは

けにさやうにてこそよくと思給しを

ことさらに又いはほの中もとめん

「2ウ

(一七六五頁5行目ゝ9行目)

よりはあらしはつましく思侍しをい

かにもさるへきさまになさせ給はゝ

おろかならすなときこえ給かくに

くきけしきもなき御むつひなめ

りとみ給なから我か御心ならひにたゝ

ならしとおほすかやすからぬなるへし

かれ／＼なるせんさいの中におはなの

物より「こ」と「に」さしいてゝまねくおかしく

みゆるにまたほにいてさしたる

もつゆをつらぬきとむるたまをは

「3オ

(一七六五頁9行目ゝ14行目)

かなけにうちなひきたるなとれ
いの事なれと夕風なをあはれなり
かし

ほにいてぬ物をおもふとしのすゝき
まねくたものつゆしけくして

なつかしきほと御そともなをし
はかりき給てひわひき給へりわうし
きてうのかきあはせをいとあはれに
ひきなし給へは女君も心にいり給へる
事にて物えんしもえし「はて」給はすちぬ

「3ウ
(一七六五頁14行目〜一七六六頁5行目)

さき御几帳のつまよりけうそくに
よりかゝりてほのかにさしいて給へる
いとみまほしくらうたけなり

あきはつる野辺のけしきもしのすゝき
ほのめく風につけてこそしれ

我身ひとつのとてなみたくまるゝ
かさすかにはつかしき「け」れはあふきをま
きはしておはする心のうちもらうたく
をしはからるかゝるそは人もえ思
はなたさらめとうたかはしきかた

「4オ
(一七六六頁5行目〜10行目)

たゝならてうらめしきなめり
きくのまたよくもうつろひはてゝ
わさとつくるひたてさせ給へるは
またいとをそきに如何なるひとも
とにかあらんいとみところありてうつろ
ひたるをとりわきをらせ給て花の
中にひとへにとすんし給てなにか
しの御子のこのはなめてたる
ゆふへそかしいにしへ天人のかけ
りてひわのてをしへたるはなに

「4ウ
(一七六六頁10行目〜14行目)

事もあさくなりたるよは物う
しやとて御ことをしやり給をくち
おしとおほして心こそあさくもあらめ
むかしをつたへかたんことさへはなとて
かさしもとておほつ「か」なきてなと
をゆかしけにおほしたれはさらは
ひとりことはさう／＼しきにさし
らへし給へかしとて人めしてさ
うのことゝりよせてひかせたてまつり
給へとむかしこそまねふ人もゝの

「5オ
(一七六六頁14行目〜4行目)

し給しかとはか／＼しくひきもとめ
すなりにし物をとてゝもふれ給
はねはかくはかりの事もへたて給
つるこそ心うけれこのころみるわたり
はまたいと心とくへきほとにもあらね
とかたなりなることをもかくさす
こそあれすへて女はやらかに心うつ
くしきかよき事とこそこの中納言
もさたむめれかの君にはたつゝみ
給てこよなき中なめれはなとまめ

「5ウ

(一七六七頁4行目～9行目)

やかにうらみられてそうちなきて
すこししらせ給ゆるひたりければ
はんしきてうにてかきあはせつま
おとをかしくきこゆ伊勢の〔海〕うたひ
給御こゑのあてにをかしきを女
はら物ゝうしろにちかつきまいりてゑ
みひろけてゐたりふた所をはし
ますはつられとそれもことはりな
れは我御まへをはさいはゐ人とこそ
は申さめかゝる御あたりにまし

「6オ

(一七六七頁9行目～14行目)

らひ給へくもあらさりし年ころの
御すまゐを又かへりなまほしけに
おほしの給はするこそいと心うけれ
なとたゝいひにいへはわかき人／＼は
あなかまやなとせいす御事ともを
しへたてまつりなとして二三日こもり
おはして御物いみなと事つけ給を
かの殿にはうらめしくおほして
おとゝうちよりいて給けるまゝに
こゝにまいり給へれば宮こと／＼しけ

「6ウ

(一七六七頁14行目～一七六八頁5行目)

なるさましてなにしにいましつ
るそとむつかり給へとあなたにわた
りてたいめんし給ことなる事なき
ほとはこの院をみてひさしくなり
はへるもあはれにこそなとむかしの御
物かたりすこしきこえ給てやかてひ
きつれきこえ給ていて給ぬ御ことも
のとはらさらぬかむたちめ殿
上人なともいとおほくひきつゝき
給へりいきをひちたきをみるに

「7オ

(一七六八頁5行目～9行目)

ならふへくもあらぬそくしいたかり
ける人／＼のそきてみたてまつりて
さもきよらにをはしけるをとゝかな
さはかりいづれともなくわかくさかりにて
きよけにをはさうする御こともの

に給へきもなかりけるあなめてたやと

いふもあり又さはかりやむことなま「け」なる

御さまにてわさと御むかへにまいり給

へるこそ「に」くけれやすけなの世中やと

うちなけくもあるへし御みつからも 「7ウ

(一七六八頁9行目〜14行目)

きしかたを思いつるよりはしめかの

はなやかなる御なからひに「たち」まじるへく

もあらすかす「か」なる物をといよ／＼心ほそ

ければ猶心やすくこもりなんのみこそめや

すからめなといとおもふ「ほえ」給はかなくて年

もくれぬ正月つこもりかたよりれいな

らぬさまになやみ給を宮東「また」御らんし

しらぬ事にていかならんとおほしなけき

てみすほうなど所／＼にてもこゝにても

あまたせさせ給に又はしめそへ 「8オ

(一七六八頁14行目〜一七六九頁5行目)

させ給いといたうわつらひ給へはきさき
の宮よりも御とふらひありかくてみと
せになりぬれとひとゝころの御心さし
こそをろかならねおほかたの世には物／＼
しくずもゝてなしきこえさりつる

をこのをりそいつくにも／＼きこしめし

おとろきて御とふらひとも人もきこえ

ける中納言の君は宮のおほしさはく

にもおとらすいかにせんとなけきて心

くるしうしろめたくおほさる 「8ウ

(一七六九頁5行目〜10行目)

れとかきりある御とふらひはかりこそ

あれあまりもえまうてたまはてしのひて

御いのりともせさせ給ける女宮の御

もきたゝこのころになりて世中ひゝ

きのゝしるよろつのことたゝみかとの

御心ひとつなるやうにおほしいそきて

御うしろみなきしもこそ中／＼めて

たけにみえける女御のしをき給へること

をはさる物にてつくもところさえ所さ

るへきす両ともなとゝり／＼につかまつる 「9オ

(一七六九頁10行目〜一七七〇頁1行目)

ことゝもいとかりなしやかてそのほとに
まいり給へきやうにありければおと「こ」かたにも
心つかひし給ころなれとれいの事な
れはそなたさまには心もいらてこの御事
のみにとをしくなけかるべきさらきの
ついたちころになをし物とかいふことに
権大納言になり給て左大将かけ給つ右
大殿ゝひたりになり給てかへ給へる所也
けりよろこひに所々あり「き」給てこの
宮にもまいり給へりいとくるしう「9ウ

(一七七〇頁1行目ゝ6行目)

し給へはこなたにおはしますほとに成
けりやかてまいり給へり僧なときふらひて
ひんなきかたにとをとろき給て
あさやかなる御なをしなとたてまつ
りかくてひきつくろひておもてた
ふのはいし給へる御さまもとり／＼に
いとめてたしやかてこよひ官の人に
ろく給あるとこにさうしたてまつ
り給をなやみ給人によりてそおほし
たゆたふめる左大臣殿ゝし給ける「10オ

(一七七〇頁6行目ゝ11行目)

まゝにて六条院にてなんありける
ゑかのみこたちかむたちめたいき
やうにおとらすあまりもとかしきま
てなんつとひ給けるこのみやもわた
り給てしつ心なければいそきかへり給
ぬるを大殿ゝ御かたにはいとあかす
めさましと「の」給おとるへうあらぬ御程
なるをたゝいまおほえのはなやかさに
おほしをこりてをしたち「も」てなし
給へるなめりかしからうしてそのあ「10ウ

(一七七〇頁11行目ゝ一七七二頁2行目)

かつきおとこにてむまれ給へりける
を宮もかひありておほしたり大将殿
もよへおはしましたりしかしこま
りにやかてこの御よろこひもうちそへて
たちなからまいり給へりかくこもりを
はしませはまいり給はぬ人なし御うふ
やしなぬ三日はれいのたゝ宮の
御わたくしことにて五日のよは大将殿
よりとき五十くかゆらてのことにわう
はんなどはよのつねのやうにてこもち「11オ

(一七七二頁2行目ゝ7行目)

の御まへのつかさね廿ちこの御そ
いつへかさねて御むつきなとこそこ
と／＼しからすしなし給へれとこまかに
みれはわさとめなれぬ心はへなとみ
えける宮の御前にもせかうのをしき
たかつきともにてふすくまいらせ給へ
り女かたの中にはつかさねはさる
ものにてひわりこ卅さま／＼しつく
したることゝもおほかりひとめこと
老ことしくはとことさらにしなし

「 11ウ

(二七七二頁7行目～12行目)

給はぬなりけり七日の夜はきさいの
宮の御うふやしなぬなれはまいり
給人／＼いとをほかり宮の大夫をはし
めてかむたちめ殿上人かすしら
すたうちあそひのゝしるうちにも
きこしめして宮のはしめておと
なひ給なるにはいかてかはとの給はせて
御はかしたてまつらせ給へり九日も大
殿よりつかまつらせ給へりよろしからず
おほすあたりなれと宮のおほさん

「 12オ

(二七七二頁12行目～二七七三頁2行目)

ところあれば御このきむたちなと
まいり給てすへていと思事なけにめ
てたければ御みつからも月ころものを
もはしく心地のなやましきにつけ
ても心ほそくおほしわたりつるに
かくおもたゝしくいかめしきことゝ
ものおほかれはすこしなくさめ
もやし給らん大将殿はかくさへをと
なひはて給めれはいとゝ我かたさまは
けとをくやならんまた宮の御心

「 12ウ

(二七七三頁2行目～7行目)

手習

みえつらむとはつかしくついかくいき
かへりにけるかと思もいみしくゝちをし
ければいみしうおほえて中／＼しつみ給へ
りつるひころはうつゝし心もなきさまに
て物いさゝかまいるをりもありつるを
露はかりのゆをたにまいらすいかなれは
かくたのもしけなくのみおはするそうち
はへぬるみなとし給へりつる事はさめ
給てさはやかにみえ給へれはうれしと
おもひきこゆるをとなく／＼たゆむ折なく

「 1オ

(二七七八頁12行目～二七七八頁3行目)

そひゐてあつかひきこえ給ある人／＼も
あたらしきさまかたちをみれば心をつく
してそをしみまもりける心にはなを

いかてしなむとのみそ思わたり給へとさはか
りにていきとまりたる人のいのちなれば
いとしうねくてやう／＼かしらもたけ

たまへは物まいりなとし給にそ中／＼おも
やせもてゆくいつしかとうれしく思き

こゆるにあまになし給てよさてのみ

なんいくやうもあるへきとの給へはいとをし

「 1 ウ

(二〇〇二頁3行目～8行目)

けなる御さまをいかてかさはなしたて
まつらむとてたゝいたゝき斗をそきて

五かいをうけさせたてまつる心もとなけれと

もとよりをれ／＼しき人のこゝろにてえさかしう

しゐてもの給はすそうつはいまはかはかり

いたはりやすめたてまつり給へといひをき

てのほり給ぬゆめのやうなる人をみたて

まつるかなとあま君はよろこひてせめて

おこしすゑ御くしてつからけつり給さはか

りあさましくひきゆいてうちやりたりつれと

「 2 オ

(二〇〇二頁8行目～13行目)

いたくもみたれすときはてたれはつや／＼と
けうら也一とせたらぬつくもかみおほかる
所にてめもあやにいみしき天人のあま

くたるをみたらむやうに思あやうき心地

すれとなとかいと心うくかはかりいみしく

思きこゆるに御こゝろをゝきてはみえ給いつ

こにたれときこえし人のさる所にはいかて

おらせしそとせめてとふをいとはつかしと

思てあやしかりし程にみなわすれたるにや

あらむありけんさまもさらにおほえ侍らす

「 2 ウ

(二〇〇二頁13行目～二〇〇三頁5行目)

たゝほのかに思いつる事こそはたゝいかてかこ

のよにあらしと思てゆふくれことにはし

ちかくてなかくめし程にまへちかくおほきなる

木のもとより人のいてきてゐて行心

地なんせしそれよりほかの事は我なから

たれともえ思いてられ侍らすといとらうた

けにいひなして世中にありけりとはいかて

人にしられしきゝつくる人もあらは

いといみしくこそとてなき給あまりとふ

をはくるしとおほしたれはえとはすかくや

「 3 オ

(二〇〇三頁5行目～10行目)

ひめをみつけたたりけんたけとりのをきな
よりもめつらしき心地するにいかなる物ゝ
ひまにきえうせんとすらんとしつ心なくそ
おほしけるこのあるしもあてなる人なり
けりむすめのあまきみはかんたちめの
きたのかたにてありけるかその人なく
なり給てのちむすめたゝひとりをいみし
うかしつきてよきゝむたちをこにして
いみしうかしつき思あつかひけるをそのむ
すめの君なくなりには心うしいみしと

「 3 ウ

(二〇〇三頁 10 行目ゝ二〇〇四頁 1 行目)

思いりてかたちをもかへかゝる山さとは
すみはしめたるなりけりよとゝもにこひ
わたる人のかたみにもおもひよそへつへ
からむひとをたにみいてゝしかなとつ
れ／＼と心ほそきまゝに思なけきけるを
かくおほえぬ人のかたちけはひもまさ
りさまなるをえたれはうつゝの事と
もおほえすあやしなからうれしと思ね
ひにたれといときよけによしありて
ありさまもあてはかなりむかしの

「 4 オ

(二〇〇四頁 1 行目ゝ 6 行目)

山さとよりはみつのおともなこやか也つ
くりさまゆへある所のこたちおもし
ろくせんさいなともをかしうゆへを
つくしたりあきになりゆけはそら
のけはひあはれなるにとたのいね
かるとて所につけたるものまねひし
つゝわかき女ともはうたうたひけう
しあへりひたいきならすをとなども
をかしみしあつまちの事なんとも思
いてられてかのゆふきりの宮す所の

「 4 ウ

(二〇〇四頁 6 行目ゝ 10 行目)

うたよみにしへ思いてつゝさま／＼
物かたりなとするにいらふへきかたも
なければつく／＼とうちなかめて
我くてうきよの中にめくるとも
たれかはしらむ月の宮こにいまは
かきりと思はてゝし程は恋しき人
おほかりしかとことひと／＼はさしも思
てられすたゝをやいかにまとひ給けん
めのとのよろつにいかて人なみ／＼になさ
むと思いられしをいかにあえなき心地

「 5 オ

(二〇〇五頁 7 行目ゝ 12 行目)

しけんいつこにかあらむ我よにある
物とはいかてかはしらんをなしこゝろな
る人もなかりしまゝによろつへたつる
ことなくかたらひみたれたりし右近な
とも折々思いてらるわかき人のかゝる
山さとにいまはとたへこもるはかたき
わさなりければたゝいたくとしへに
けるあま七八人そたかへのてにては
ありけるそれかむすめまこやうの
物とも京に宮つかえするもことさまにて

「 5ウ

(二〇〇五頁12行目〜二〇〇六頁2行目)

あるも時々そかよひけるかやうの人に
つけてみしあたりにゆきかよひ
よにありけりとたれ／＼にもきこえたて
まつらむ事いみしうはつかしかるへし
いかなるさまにてさすらへけんなど思
やりのよつかすあやしかるへきを思へ
はかゝる人／＼にかけてもみえすたゝし
しうこもきとてあま君のわか人に
したりけるふたりをのみその御かたに
いひわきたるみめも心さまもむかし

「 6オ

(二〇〇六頁3行目〜7行目)

みし宮ことりにゝたることなし何事に
つけてもよの中にあらぬ所はこれにやと
そかつは思なされけるかくのみひとに
しられしとしのひ給へはまことに
わつらはしかるへきゆへあるへき人にも
ものし給らむとてくはしきことある
人／＼にもしらせすあま君のむかしの
むこのきみいまは中将にておはしけるか
おとうとのせんしのきみそうつのもとには
物し給ける山こもりしたるとふらひに

「 6ウ

(二〇〇六頁7行目〜12行目)

うちわすれすやみ侍らぬをかつはあやしく
思給へるなどの給へは心のうちあはれにすぎ
にしかたの事も思給へわすれぬをあなか
ちにすみはなれかほなる御ありさまにお
こたりつゝ山こもりもうらやましくつねに
いてたち侍をゝなしくはなとしたいまとはるゝ
人／＼にさまたけらるゝやうに侍てなんけふは
みなはふきすてゝものし給との給山こも
りの御うらやみは中／＼いまやうたちたる
御ものまなひなんむかしをゝほしわすれぬ

「 7オ

(二〇〇七頁8行目〜13行目)

御こゝろはえもよになひかせ給はさりけ

りとおろかならず思給へしらるゝ折

おほくなといふ人／＼にすいはんなどやうの

物くはせ君にもはすのみなとやうの

ものいたしたれはなれにしあたりにて

さやうの物もつゝみなき心地してむら

さめのふりいつるにとゝめて物かた

りしめやかにし給いふかひなくなり

にし人よりもこのきみの心はえなと

のいと思やうなりしをよその物に思なし

「 7ウ

(二〇〇七頁 14 行目ゝ二〇〇八頁 4 行目)

たるなんいとかなしきなとかわすれ

かたみをたにとゝめ給はすなりにけん

と恋しのふる心也ければたまさかにかく物

し給へるにつけてもめつらしくあはれに

おほゆへかめるとはすかたりもしいてす(つ)へし

ひめきみはわれはわれと思いつる方おほ

くてなかめいたし給へるさまいとうつく

しゝろき一えのいとなさけなくあさや

きたるにやひかりもみえすくろきをきせ

たてまつりてかゝる事ともみしには

「 8オ

(二〇〇八頁 4 行目ゝ 10 行目)

かはりてあやしくもあるかなと思へは

こは／＼しくいらゝきたる物ともき給へる

しもいとをかしきすかた也御まへなる人／＼

も故ひめ君のおはしましたる心地のみ

し侍に中将殿をさへみたてまつれば

いとあはれにこそおなしくはむかしのさ

まにておはしまさせはやいとよき御よ

はひならむかしといひあへるをあないみ

しやよにありていかにも／＼人にみえん

こそそれにつけてむかしの事思いてらる

「 8ウ

(二〇〇八頁 10 行目ゝ二〇〇九頁 1 行目)

へきさやうの事すちは思たえてんかし

わすれなと思あま君のいり給へるまゝに

まらうとあめのけしきをみわつらひて

少将といひし人のこゑをきゝしりて

よひよせ給へりむかしみし人／＼はみなこゝに

物せらるらむやと思なからもかうまいりく

る事もかたくなりたるを心あさき

にやたれも／＼みなし給らむなどの給

つかふまつりなれにし人にてあはれ

なるむかしの事とも思いてたるついでに

「 9オ

(二〇〇九頁 1 行目ゝ 6 行目)

かのはうのつまいりつるほと風のさはか
しかりつるさはきにすたれのひま
よりなへてのさまにはあるましか
りつる人のうちたれかみのみえつるは
よをそむき給へるあたりにたれそと
なんみおとろかれつるとの給ひめ君の
たちいて給へりつるうしろてをみたて
まつりてなめりと思てましてこまか
にみせたらはと心とまり給なんかし昔
の人はこよなくおとり給へりしをたに

「 9 ウ

(二〇〇九頁 6 行目〜 10 行目)

いまたわすれかたくし給めるをと心ひと
つに思てすきにし御事をわすれかた
くさめたまふめりしにおほえぬ人を
えたてまつり給てあけくれみ物に思き
こえ給めるをうちとけ給へる御ありさま
をいかて御覧しつらむといふかゝる事
こそありけれとをかしくてなに人な
らんけにいとをしかりつとほのかなり
つるを中／＼おもひいつこまかにとへと
そのまゝにもいはすをのつからきこし

「 10 オ

(二〇〇九頁 10 行目〜 二〇一〇頁 1 行目)

めしてんとのみいへはうちとけにとひたつ
ねむもさまあしきこゝちしてあめも
やみ日もくれぬへしといふにそゝのかさ
れていて給まへちかき女郎花をゝ
りてなにしをふらむとくちすさひて
ひとりこちたてり人の物いひを
さすかにおほしとかむるこそなとこ
たいのひとゝもは物めてをしあへり
いときよけにあらまほしくもねひ
まさり給にけるかなとおなしくは

「 10 ウ

(二〇一〇頁 1 行目〜 6 行目)

我したらんあやまちのやうにをしうかなしく
くやしければつゝみもあえず物くるを
しきまてけはひもきこえぬへければ
のきぬかはかりのさましたる人をうし
なひてたつねぬ人もありけんやまた
その人かの人むすめなんゆくへもし
らすうせにたるまたもえんしてよ
をそむきけるなどをのつからかくれなる
へきをなとあやしう返々思あまりても
かゝるさましたらん人はうたてもおほえし

「 11 オ

(二〇三八頁 12 行目〜 二〇三九頁 3 行目)

中／＼み所まさりてこゝろくるしかるへきを
しのひたるさまに猶かたらひとりてんと思へ
はまめやかにかたらふよのつねのさまには
おほしはゝかる事もありけんをかゝるさ
まになり給へたるなん心やすくきこえ
つへく侍さやうにをしへきこえ給へきし
かたのわすれかたくてかやうにもまいり
くるを又いまひとへ心さしをそへてこそ
などの給いとゆくすえうしろめたく心ほそく
みゆる有様に侍めるにまめやかなるさまに

「 11ウ

(二〇三九頁3行目～9行目)

事のみまさりてなんひたちはいとひ
さしくおとつれきこえ給はさんめり
えまちつけ給ましきさまになんみえ給
とのたまふに我やのなとあいなくみゝとま
るに又いふやうまかりのほりてひころに
なり侍ぬるをゝほやけことのいとしけく
むつかしくのみ侍にわつらひてなん昨日
も候はんと思給しを大將殿のうちに
おはせし御ともにつかふまつりてこ八
の宮のすみ給し所におはして日くらし

「 12オ

(二〇四二頁7行目～12行目)

給し故宮の御むすめにかよひ給
しをまつひとゝころはひとゝせうせ給て
その御おとゝ又しのひてすゑたて
まつり給へりけるをこそ春又うせ
給にければそのはてのわさせさせ給
はん事かのてらのりしになんさるへき
事の給はせてなにかしもかの女の
御さうそくひとくたりてうし侍へき
をさせ給てたまひてむやをらす
へき物はいそかせ侍なんといふをきくに

12ウ

(二〇四二頁12行目～二〇四三頁2行目)

〔付記〕本研究は、国文学研究資料館共同研究「相愛大学「春曙
文庫」に関する研究―書物と人」および、JSPS科研費
(課題番号：22KJ2183) および、JSPS科研費(課題番
号：22KJ2185)の助成を受けた研究成果の一部であ
る。

(いいだ・みか 本学博士後期課程・日本学術振興会特別研究員
／かわぶち・すずか 本学博士後期課程・日本学術振興会特別研
究員)